

# 日本で生活する複数の民族的背景を持つ人々に対する有効なケア —集団に関わる自意識の発達初期に何が起こるのか?—

藤岡 勲  
(東京大学大学院教育学研究科)

## 〈要 旨〉

日本において、「ハーフ」や「ダブル」と呼ばれる複数の民族的背景を持つ人々が急増しているが、かれらについての研究が少なく、心理援助の指針となる日本のモデルがない。また、北米の多文化間カウンセリングでは、集団に関わる自意識の発達理論が重要な役割を担っているが、発達初期に何が起こっているのか十分に明らかにされていない。本研究は、質的研究法の一手法であるグラウンデッド・セオリー法を援用し、かれらの自意識の発達初期を分析し、《不一致としてのアクシデント》モデルを構築した。ここでは、〈「内」での慣習〉と〈「外」での状況〉との間で〈「内」と「外」の不一致〉が起こり、《不一致としてのアクシデント》のコンテクストとなる。そして、〈「内」と「外」の不一致〉が、《不一致としてのアクシデント》における本人と他者とのやりとりの継起となり、〈他者の言動〉によって、〈事なきを得る〉こともあれば、本人が〈不快感をおぼえる〉こともある。そして、〈不快感をおぼえる〉ことにより、《不一致としてのアクシデント》の帰結として、〈不快感への対処〉を行うことを明らかにした。そして、明らかにしたことの学術的意義と臨床的意義を議論した。

## 〈キーワード〉

多文化間カウンセリング 複数の民族的背景を持つ人々 自意識 質的研究

## 【問題と目的】

日本において、「ハーフ」や「ダブル」と呼ばれる複数の民族的背景を持つ人々がここ 20 年で約 2.5 倍と急増しており(厚生労働省大臣官房統計情報部, 2009)、国際化が進む中、今後増加が予測される。だが問題は、かれらについての研究が少なく、心理援助の指針となる日本のモデルがないことである。本稿は、この指針につなげるために、かれらの自意識の発達初期を分析する。発達初期に着目するのは、多文化間カウンセリングにおいて重要な役割を担う枠組みが抱える問題にこたえるためである。

近年、クライアントおよびセラピストの社会・文化的要因を考慮する多文化間カウンセリ

ングの重要性が増している。北米では、多文化間カウンセリングが心理療法の第 4 勢力と見なされるまで成長し(Pedersen, 1990)、数多くの研究がなされている。また日本でも、外国人の増加に伴い、その重要性が着目されてきている(例えば、井上, 1997; マーフィ重松, 2004)。

この多文化間カウンセリングでは、集団に関わる自意識の発達モデルが、重要な枠組みとして位置付けられている。この枠組みは、どのような段階を経て、集団に関わる自意識が発達するかを提示しており、各段階に特徴的な認知・感情・行動があることを示している(例えば、Sue & Sue, 2008)。例えば、これらのモデルに

における発達初期では、個人は、マジョリティ集団の文化に追従した形の認知・感情・行動を示すと言われている。そして、そのような特徴が、臨床場面において、セラピストとのマッチング、セラピストとの関係性のあり方等に影響を与えている。

このような重要性があることから、この枠組みでは数多くのモデルが構築されている。マイノリティ集団の発達モデルとしては、黒人のアイデンティティ発達モデル(例えば、Cross, 1971, 1991; Helms, 1990)、人種的マイノリティのアイデンティティモデル(例えば、Helms, 1995)、複数の人種的背景を持つ人々のモデル(例えば、Poston, 1990)、女性のアイデンティティ発達モデル(例えば、Ossana, Helms, & Leonard, 1992)などがある。また、マジョリティ集団の発達モデルも構築されており、白人のアイデンティティ発達モデル(例えば、Helms, 1990)などがある。

これらのモデルに共通している点がある。それは、集団にかかわる自意識の発達初期が、自身の集団帰属性があまり意識されていない点である。そして、意識化されていなかった集団帰属性が意識化されることによって、集団にかかわる自意識が発達し始める点も共通している。例えば、黒人アイデンティティ発達モデル(Cross, 1971, 1991; Helms, 1990)では、マジョリティである白人の文化や社会制度に追従しており、自身の黒人への集団帰属性は意識化されていない。だが、それが意識化されることによって、黒人としてのアイデンティティが発達し始める。また、複数の人種的背景を持つ人々のモデル(Poston, 1990)でも、個人(多くの場合、小さい子ども)は、自身の集団帰属性が意識化

されていない。だが、自身が特定の人種集団に属していることが意識化されることによって、複数の人種的背景を持つ者としてのアイデンティティが発達し始める。

だが問題は、集団にかかわる自意識の根幹となるこの共通点が、どのようなプロセスを経て展開しているか十分に説明されていないことである。多くのモデルでは、これまでの考え方などを変えるような「何か」が起こることで、意識化されていなかったものが意識化されることが想定されている。だが、その「何か」が、どのようなものであるかは十分に説明されていない。

この問題にこたえるため、日本で生活する複数の民族的背景を持つ人々の集団に関わる自意識の発達初期を分析する。発達初期に何が起こっているかを知ることが、学術的にだけでなく、臨床的にも重要なテーマである。それは、集団に関わる自意識が意識化され始めることによって、これまで自身が慣れ親しんだ価値観等に疑問がなげかけられ、集団帰属性に悩み混乱する可能性があるからである(例えば、Sue & Sue, 2008)。この混乱のもととなりうるプロセスで何が起こっているかを把握することは、具体的な対応策を考えていく上で重要だと考えられる。

## 【方法】

### (1) 対象者

本研究の対象者は、日本で生活している複数の民族的背景を持つ人々(片方の親の民族的背景が日本)である。

研究協力者は、雪だるま式サンプリングを用いて集めた。つまり、著者の知人を介して協力

者を集めた。さらに協力者の中から別の協力者を紹介してもらえる場合は、別の協力者を紹介してもらった。雪だるま式サンプリングを用いたのは、日本で生活している複数の民族的背景を持つ人々は、必ずしも一定の場所に生活しているわけではない等、探すことが難しかったからである。サンプリングの結果、調査第1期（2004年）で14名、調査第2期（2009年から）で13名の計27名の協力者を得た。

今回、分析を行ったのは、調査第2期の4名である（表1）。

表1 分析対象者

	年齢	両親のバックグラウンド
第1事例	30代	アジア×日本
第2事例	20代	北米×日本
第3事例	30代	アジア×日本
第4事例	20代	北米×日本

## (2) 調査内容

協力者に対してインタビュー調査を行った。インタビューではまず、本研究の趣旨を説明し、インフォームド・コンセントを得た。そして、性別・年齢・名前・国籍・家族構成・主な地域移動・教育歴・職歴を聞いた。その上で、著者が質問を交えながらも柔軟度の高い形で、自意識の発達についてのライフストーリーを聞いた。今回の分析対象者のインタビューの長さは、1時間15分ほどから3時間25分ほどであった。

## (3) 分析法

本研究では、グラウンデッド・セオリー法 (Charmaz, 2006) を援用して分析を行った。それは、グラウンデッド・セオリー法が、質的研究法の中でも相対的に手順が明確化されているからである。また、グラウンデッド・セオリー法が、変化のプロセスを分析する際に有効でもあるからである。

分析の第1段階として、第1事例と第2事例のインタビューを文字化したトランスクリプトを意味の単位に切片化し、ラベリングを行った。次に、似たラベルをカテゴリーに統合していった。

第1段階で構築したカテゴリーを洗練させるため、第2段階で第3事例と第4事例のインタビューを分析した。ここでは、第1段階で構築したカテゴリーを参考にしつつ、インタビューを文字化したトランスクリプトを意味の単位に切片化し、ラベリングを行った。そして、そのラベルをもとにカテゴリーの追加および修正を行った。

第3段階では、カテゴリー間の関係をみていった。その際には、軸足コーディング (Strauss & Corbin, 1990) の発想を念頭においた。また、比較 (comparative method) も行い、カテゴリーおよびカテゴリー間の関係を精緻化していった。

上記の一連の作業を行いながら覚書 (memo) も書いた。また、ラベル・カテゴリー・カテゴリーの関連付けを洗練させるために、前の分析ステップに立ちかえることもした。

なお、以上の分析作業を行うにあたって、質的データ分析ソフトウェアである ATLAS.ti 6 を用いた。

## 【結果】

分析の結果、集団に関わる自意識の発達初期は、《不一致としてのアクシデント》モデルとして表すことができることが明らかになった (図1)。

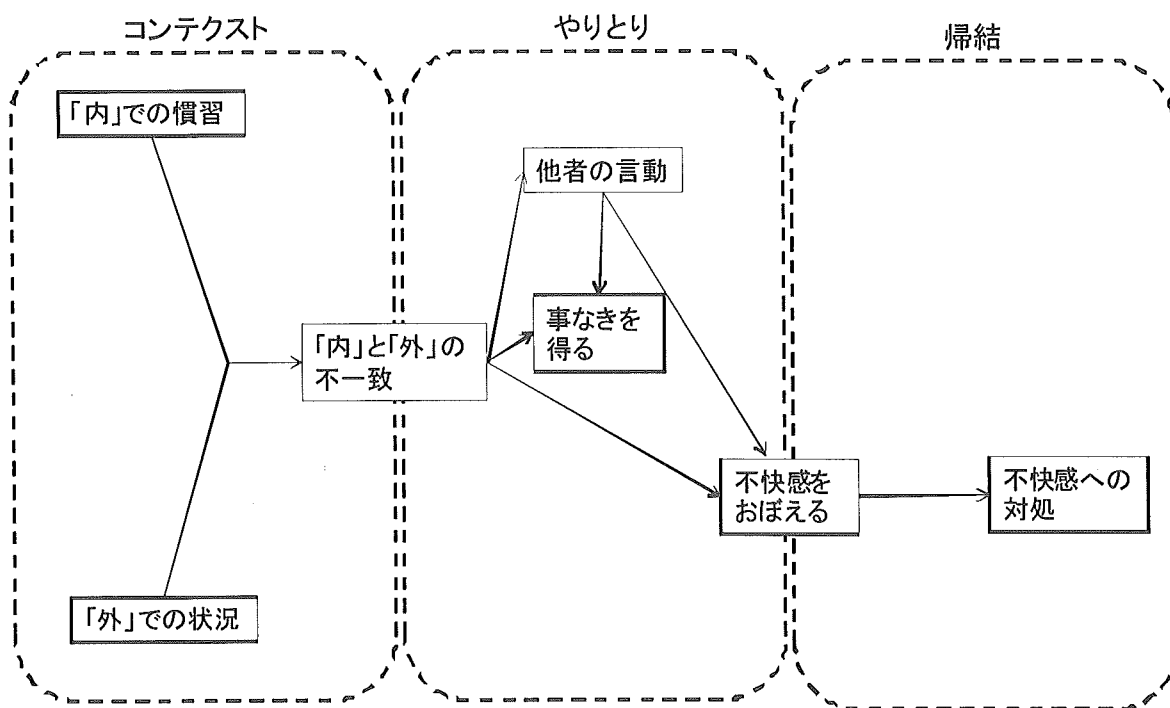


図1 不一致としてのアクシデント

このモデルは3つの側面から成り立っている。それらは、(1)《不一致としてのアクシデント》が起こるきっかけとなる「コンテキスト」、(2)《不一致としてのアクシデント》における「やりとり」、(3)《不一致としてのアクシデント》の「帰結」である。図1の展開は、分析対象4事例の全てでみられた。以下、図1の流れを、主に第1事例を用い、補足的に他事例のデータも用いながら解説する。

#### (1) コンテキスト

《不一致としてのアクシデント》モデルでは、〈「内」での慣習〉と〈「外」での状況〉がコンテキストとして存在する。

〈「内」での慣習〉とは、家族等のもことからいた集団で実践されている考えや言動のことである。例えば、第1事例は、次のように語っている。

ま父親がムスリムで、ですごくその一イスラム教というものを自分の娘にも受け継いでもらって、あの、信じて、その一practiceする？っていうのをすごく、あの自分、彼、ま育てられる期間があって……あの一神様の名前を言って、いただければ神様がちゃんと、あの一、(床に落ちた食べ物も) digest してくれるって

このような〈「内」での慣習〉がある一方で、〈「外」での状況〉がある。〈「外」での状況〉とは、もともからいた集団とは異なる集団が、いかなる環境的・慣習的状況にあるかを指す。第1事例では、その慣習面が次のように述べられている。

小学校の時に、ようするに食べ物を、こうやって床に落としちゃうとバイ菌とかが

ついちゃうから、なんて言うの、あの一、  
食べちゃいけませんと。汚いから、体に悪  
いし。って教わったわけ。

また、「外」での状況の環境面として、イン  
ターナショナルスクールに通っていた第3事  
例は、海外に引っ越した際の転校先のことを次  
のように述べている。

中学校の時は、あたし元々はずっとここ  
(日本)でインターに行ってたからぜん  
ぜん、ぜんぜん環境が違って一、あ、  
すごくカリキュラムも違うわ、例えば言語  
も、みんな、ま英語も、もちろんみんな話  
すんだけど、でも Chinese family から来て  
るから、みんな中国語で会話したりとか、  
.....なんかとにかく学校の rules とか、あ  
の、人との距離だったりとか、コミュニケ  
ーションの仕方とかもぜんぶ違って

以上のように、「内」での慣習と「外」  
での状況が異なると、「内」と「外」の不一  
致が起こる。これは第1事例が以下に語るよ  
うに、もとの集団での実践されていた慣習と、  
新たに入った集団での状況が異なる状況を指  
す。

父親はやっぱりそういうふうにあの一、こ  
れが正しい宗教なんだよ、とか、これがい  
いところなんだよ、とか、これが正しいこ  
となんだよって一方的に言う、言い聞かせ  
てるんだけど、やっぱり、外出るとそうじ  
ゃないものがたくさんあるわけよね。たと  
えば私の友達はそんなこと信じないし、私

の先生たちはそういうこと信じないし  
.....そういうやっぱり、その一、 conflict  
みたいなものっていうのが、ま  
contradiction っていうのかな、っていうの  
が、やっぱり、子ども心、子どもながらに  
やっぱりそういうことにたくさん気づい  
ていて

以上のように、「不一致としてのアクシデン  
ト」においては、「内」での慣習と「外」  
での状況の間の違いにより「内」と「外」  
の不一致が起こることがコンテキストとなる。

## (2) やりとり

「内」と「外」の不一致というコンテク  
ストが発生した状況で、複数の民族的背景を持  
つ本人と他者とのやりとりが展開する。そこ  
では、「他者の言動」がどのようなものになるか  
によって、本人に何がもたらせるかが変わっ  
てくる。

まず、「内」と「外」の不一致が起こっ  
ても、「他者の言動」が本人にストレスを与え  
るものでなければ、「事なきを得る」ことがあ  
る。例えば第1事例では、イスラム教徒の父の  
前で、学校で習った宗教色の強いクリスマスの  
歌を歌うという「内」と「外」の不一致状  
況が起こった。だがそこでの父の「他者の言動」  
が、「歌詞を聞いて。で、結局気づかなかっ  
たからよかったんだけど」というものであったた  
め、「事なきを得た」。

だが、「内」と「外」の不一致が起こり、  
「他者の言動」が本人にストレスを与えるもの  
である場合、本人は「不快感をおぼえる」。例  
えば第1例では、家と学校の間で「内」と「外」  
の不一致があり、イスラム教徒の父が「他者

の言動)として、「友達はこういうことやれるのに私はできないとか、お前はやっちゃだめだっっていうことは、確かにたくさんあった」というように、第1事例のしたいことをさせなかった。そのため第1事例は、「イライラしているか、その葛藤の中でもがきながら」というように〈不快感をおぼえる〉ようになった。

そして〈不快感をおぼえる〉際には、さまざま程度のものである。例えば、第4事例が「なんかこう、くすぶっている感じっていうのはずっとありましたね」というように、軽度だが長期的に持続するものがある。その一方で第3事例が語るように、症状のような形であらわれることもある。

ある時期すごいなんか、誰かに「何歳？」って聞かれた時があって、まだ(転校先に)行ったばかりだから14とか15だったんだけど、自分が何歳だったか分からなくなってたぐらいー、ま、解離してたっていうかー

以上のように、〈「内」と「外」の不一致〉が継起となり、〈他者の言動〉によって〈事なきを得る〉こともあれば、〈不快感をおぼえる〉こともあるというやりとりが、《不一致としてのアクシデント》において起こる。

### (3) 帰結

他者とのやりとりによって〈不快感をおぼえる〉場合、その帰結として、複数の民族的背景を持つ人々は〈不快感への対処〉を行う。〈不快感への対処〉は、主に4つに分類できる。

1つ目は、〔第3者にサポートしてもらう〕である。これは、〈他者の言動〉における「他

者」とは別の人物にサポートしてもらうことで、〈不快感への対処〉を行おうとするものである。例えば、父がやりたいことをさせないという〈他者の言動〉のために〈不快感をおぼえる〉ことになった第1事例では、「どちらかっていると、うちのパターンとしては、母親が間に入るんだけど」というように、母という〔第3者にサポートしてもらう〕ことで〈不快感への対処〉を行っていた。

〈不快感への対処〉の2つ目のタイプは、〔他者に働きかける〕である。これは、〈不快感をおぼえる〉ような〈他者の言動〉をおこなった「他者」に対し、本人が直接働きかけるものである。例えば第4事例は、小学校に「入学した次の日に折り紙が、なんか、あの、机の中いっぱい入っていて、なんか『死ね』だの『外人』だの、わーっと入ってて」ということに対し〈不快感をおぼえる〉状態となった。だがそれに対し、「そうしたらすぐ、こう、あの、誰か特定して自分から向かって行ったんですけど(笑)」というように〔他者に働きかける〕形で〈不快感への対処〉を行った。

3つ目の〈不快感への対処〉のタイプは、〔コンテキストを変える〕である。これは、〈「内」と「外」の不一致〉を起こすコンテキストを変えることで〈不快感への対処〉を行うものである。例えば、インターナショナルスクールに通っていた第3事例は、中国系の多かった転校先というコンテキストの中で〈不快感をおぼえる〉状態になっていた。だが、以下で語っているように、中国系の多い学校から、もとのインターナショナルスクールに似た学校を選択する形で〔コンテキストを変える〕ことで、〈不快感への対処〉を行った。

今度は自分で受験して、やっと高校は自分で選んで、もっと全然違う English speaking school? English speaking school っていうか、ま、English speaking society のあるような、そういうほんとに English base な学校に一人自分から選んで移って一

〈不快感への対処〉の4つ目のタイプは、〔距離を取る〕である。これは、不快感を与えるものから距離を取ることで〈不快感への対処〉を行うタイプである。例えば、「目立ったり、変わってる」ことで周囲の子どもから「ターゲット」になる形で、第2例は〈不快感をおぼえる〉状態になっていた。それに対し「けっこう人に、心を開かないっていうか、けっこう自分の世界に入る」ようにして〔距離を取る〕形で〈不快感への対処〉を行っていた。

このように、《不一致としてのアクシデント》において複数の民族的背景を持つ人々は、他者とのやりとりで〈不快感をおぼえる〉状態になったことに対し、帰結として〔第三者にサポートしてもらう〕〔他者に働きかける〕〔コンテキストを変える〕〔距離を取る〕という4タイプの〈不快感への対処〉を行っていることが明らかになった。

### 【考察】

本研究は、日本で生活する複数の民族的背景を持つ人々の集団に関わる自意識の発達初期についてグランデッド・セオリー法を援用し分析した。そして、《不一致としてのアクシデント》モデルを構築した。そこでは、〈「内」での慣習〉と〈「外」での状況〉との間で起こる〈「内

と「外」の不一致〉が、《不一致としてのアクシデント》のコンテキストとなる。そして、〈「内」と「外」の不一致〉が、《不一致としてのアクシデント》における本人と他者とのやりとりの継起となり、〈他者の言動〉によって、〈「内」と「外」の不一致〉が、〈事なきを得る〉こともあれば、〈不快感をおぼえる〉こともある。そして、〈不快感をおぼえる〉ことにより、《不一致としてのアクシデント》の帰結として、〈不快感への対処〉を行うということを明らかにした。

多文化間カウンセリングにおける集団に関わる自意識の発達理論では、何かが起こり、マジョリティ文化に追従する状態からそれに疑問を投げかける段階に至ると考えられていた。それに対し本研究では、この何かが、《不一致としてのアクシデント》であることを明らかにした。つまり、集団に関わる自意識の発達を突き動かす要素として、これまでのあり方を揺さぶるアクシデントが必要なのである。そして、そのアクシデントは、従来の〈「内」での慣習〉と〈「外」での状況〉の間における不一致が起こるものであることが重要なのである。

また、多文化間カウンセリングの集団に関わる自意識の発達理論では、発達初期において個人は、マジョリティ文化に追従していることが想定されていた。だが本研究が明らかにしたことは、個人はかならずしもマジョリティ文化に追従した状態で集団に関わる自意識の発達が始まるわけではないことである。むしろ、集団に関わる自意識の発達が始まるのは、マジョリティ文化あるいはマイノリティ文化のどちらの場合もありうる「内」での文化を実践している状態、つまり〈「内」での慣習〉を行ってい

る状態なのである。したがって、これまでのようにマジョリティ文化に追従していることを想定するのではなく、〈内での慣習〉がどのようなものであるかを着目することが、集団に関わる自意識の発達において重要なのである。そして、〈「内」での慣習〉に従っている状態から《不一致としてのアクシデント》を発動させるきっかけとなる〈「外」での状況〉を理解することも重要なのである。

そして、これまでの研究では、自意識の発達が起こる個人にのみ焦点が当てられる傾向があった。それに対し本研究は、〈「外」での状況〉における「外」や、〈他者の言動〉における「他者」など、個人以外の要因が集団に関わる自意識の発達において重要であることを明らかにした。この視点は、自意識の発達において、個人と他者との相互作用を重視するシンボリック相互作用論の視点（例えば、Stryker, 1980/2002）が集団に関わる自意識の発達において有益になるであろうことを示唆する。また、環境と個人の相互作用を重視する文化心理学の視点（例えば、Kitayama, Duffy, & Uchida, 2007）も、有益となるであろう。

さらに、これまでの研究では、集団に関わる自意識の発達初期において、従来のあり方が揺さぶられると、個人は混乱した状態に陥ると考えられていた。だが、そのような混乱状態に陥ったことによって、何がもたらされるかは明らかにされていなかった。それに対し本研究は、このような混乱状態を〈不快感をおぼえる〉という形でとらえ、混乱以外にも様々なタイプや重度の不快感があることを明らかにした。そして、そのような〈不快感をおぼえる〉状態になった帰結として、個人が〈不快感への対処〉を

行うことで、その状態に対応していることを明らかにした。

本研究が明らかにしたことは、実際に日本で生活する複数の民族的背景を持つ人々に対するケアを行う上で参考となる臨床的意義も持つ。まず、《不一致としてのアクシデント》という形で集団に関わる自意識の発達が始まるということが明らかになった。このことから、臨床的には、どのような「アクシデント」が起きるかがテーマとなると考えられる。例えば、もしアクシデントが、いじめのような差別的な形で起こるならば、今後の自意識の発達、および発達全体に対して、否定的なインパクトを与える可能性がある。だが逆に、異なる者同士が尊重される多文化主義にもとづく集いへの参加のように、友好的な形で「アクシデント」が起これば、肯定的なインパクトを与えられるとも考えられる。

他の臨床的意義としては、予防のポイントも提示したことがあげられる。本研究は、複数の民族的背景を持つ人々が〈不快感をおぼえる〉かどうかに対しては〈他者の言動〉が決定的であることを明らかにした。したがって、この「他者」に対し、多文化主義にもとづく心理教育を行い、不快感を与えないような言動を行えるよう導くことによって、複数の民族的背景を持つ人々が〈不快感をおぼえる〉ことに対する予防につながるであろう。

さらなる臨床的意義としては、複数の民族的背景を持つ人々が実際にストレス状況に陥った際のケアの方向性も示していることもあげられる。本研究では、〈不快感をおぼえる〉状態に陥った際に、〔第3者にサポートしてもらう〕〔他者に働きかける〕〔コンテキストを変



える〕〔距離を取る〕という形で〈不快感への対処〉がなされていることを明らかにした。したがって、複数の民族的背景を持つ人々がストレス状況に陥った際には、本研究が示した対処のあり方を念頭に置きながらケアを行うことが有効になると考えられる。例えば、〈不快感への対処〉の1タイプとして〔他者に働きかける〕があった。そのような対処があることを知っていれば、アサーションの活用が有益になりうるということも考えられるようになるだろう。

日本において複数の民族的背景を持つ人々が急増している中、かれらの思考・感情・行動と深くかかわる自意識について理解することは、学術的にも臨床的にも重要である。今後は、本研究が明らかにしたことを他の複数の民族的背景を持つ人々に対しても検討し、モデルの洗練作業を進めていくことが求められる。

#### 【文献】

- Charmaz, K. (2006). *Constructing grounded theory: A practical guide through qualitative analysis*. London: Sage.
- Cross, W. E., Jr. (1971). The Negro-to-Black conversion experience. *Black World*, 20, 13-27.
- Cross, W. E., Jr. (1991). *Shades of Black: Diversity in African American identity*. Philadelphia: Temple University Press.
- Helms, J. E. (1995). An update of Helms's White and people of color racial identity models. In J. G. Ponterotto, J. M. Casas, L. A. Suzuki & C. M. Alexander (Eds.), *Handbook of multicultural counseling* (pp. 181-198). Thousand Oaks: Sage.
- Helms, J. E. (Ed.). (1990). *Black and White racial identity: Theory, research, and practice*. Westport: Praeger Publishers.
- 井上孝代 (編) (1997). 異文化間臨床心理学序説 多賀出版
- Kitayama, S., Duffy, S., & Uchida, Y. (2007). Self as cultural mode of being. In S. Kitayama & D. Cohen (Eds.), *Handbook of cultural psychology* (pp. 136-174). New York: The Guilford Press.
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 (2009). 平成19年人口動態統計(上中下3冊) 上巻 厚生統計協会
- マーフィ重松, S. (2004). 多文化間カウンセリングの物語 東京大学出版会
- Ossana, S. M., Helms, J. E., & Leonard, M. M. (1992). Do "womanist" identity attitudes influence college women's self-esteem and perceptions of environmental bias? *Journal of Counseling and Development*, 70(3), 402-408.
- Pedersen, P. (1990). The multicultural perspective as a fourth force in counseling. *Journal of Mental Health Counseling*, 12(1), 93-95.
- Poston, W. (1990). The biracial identity development model: A needed addition. *Journal of Counseling and Development*, 69(2), 152-155.
- Strauss, A., & Corbin, J. (1990). *Basics of qualitative research: Grounded theory procedures and techniques*. Newbury Park: Sage.
- Stryker, S. (1980/2002). *Symbolic interactionism: Social structural version*. Caldwell: The Blackburn Press.
- Sue, D. W., & Sue, D. (2008). *Counseling the culturally diverse: Theory and practice* (5th ed.). Hoboken: John Wiley & Sons.